

風水害に備えよう 自助・共助・公助の輪

災害による被害を最小限に抑えるためには、「自分の命は自分で守る」という「自助」の精神と、「自分たちの地域は自分たちで守る」という「共助」の精神が非常に重要です。特に、集中豪雨や土砂災害などについては、市民の皆さんが自ら気象や避難に関する情報を積極的に収集し、速やかに身を守る行動を取ることが大切です。

口うるから備えることで、被害を最小限に食い止めるように、防災についても一度考えてみましょう。

いつでもどこから始めよう

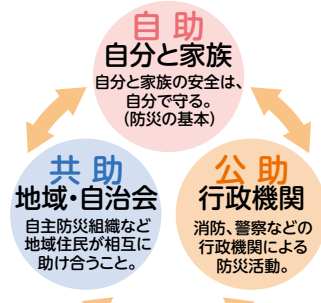
もしもの時に備える

いつ起きるか分からない災害の被害を最小限にとどめるために、非常持出品の準備・避難場所・自宅周辺の備えを確認しておきましょう(※1)。普段から点検し、問題がある場合には改善しておきましょう。

今回は、防災情報の入手方法を中心に、日ごろからできることや、もしもの時の避難方法を紹介します。

気象情報を常に確認する

気象台では、警報と注意報を市町ごとに発表しています。また、その前段階と



※阪神・淡路大震災発生直後の救助活動は約9割が、「自助」と「共助」によるものでした。

して注意を促したり、警報、注意報を補充したりするため、気象情報を提供しています。テレビやラジオなどで提供されるこれらの情報を正しく理解し、活用しましょう(下の図)。

▽注意報 災害が起こる恐れがある予想される場合。
▽警報 重大な災害が起こる恐れがあると予想される場合。

▽特別警報 警報の発表基準をはるかに超える豪雨や暴風などが予想され、重大な災害の危険性が著しく高まっている場合。

特別警報の発表基準は、大雨特別警報の場合、台風

や集中豪雨により数十年に一度の降雨量となる大雨が予想される、もしくは、数十年に一度の強度の台風や同程度の温帯低気圧により大雨になると予想される場合です。

特別警報が発表されたら、経験したことのないような異常な現象が起きそうな状況です。ただちに命を守る行動を取ってください。この数十年災害の経験がない地域でも、災害の可能性が高まっています。油断しないでください。

また、竜巻(8ページ)・土砂災害(8ページ)に関するポイントについても紹介しますので、身を守るために活用してください。

気象台が発表する気象情報(大雨)

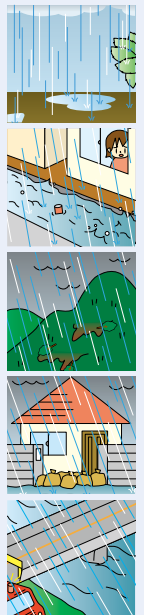


気象情報を正しく理解するために

テレビやラジオなどで提供される気象情報を正しく理解し活用するために、風水害に関する気象用語について解説します。

雨の強さと降り方

- やや強い雨(1時間に10~20mm) 地面一面に水たまりができ、雨の音で話し声がよく聞き取れなくなります。長雨になりそうなら、注意が必要です。
- 強い雨(1時間に20~30mm) 「土砂降りの雨」です。傘を差していてもぬれてしまうほどです。側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れが始まります。
- 激しい雨(1時間に30~50mm) 「バケツをひっくり返したような雨」です。覆っている人の半数くらいが雨に気が付き、がけ崩れ、山崩れなどが起きやすくなります。
- 非常に激しい雨(1時間に50~80mm) 「滝のような雨」です。水しぶきで通り一面が白っぽくなり、視界が悪くなります。傘が全く役に立たなくなり、浸水など多くの災害が発生する可能性があります。
- 猛烈な雨(1時間に80mm~) 猛烈な雨により、息苦しくなるような圧迫感があります。雨による大規模な災害の発生する恐れが強く、厳重な警戒が必要です。



※1 詳しくは、広報うつのみや1月号・6月号、わが家の防災マニュアル(市ホームページからも閲覧可)などをご覧ください。わが家の防災マニュアルは、各地域自治センター・地区市民センター・出張所などにも置いてあります。